

西来寺の帰敬式

「帰敬式(ききょうしき)」とは聞き慣れない言葉ですが、仏教に帰依し法名(ほうみやう)を名乗る儀式です。法名とは死んだ時にもらう名前だと思われる方も多いのではないのでしょうか。法名とは仏弟子となつて名乗る名前です。必ず釋○○となりません。これには、お釋迦さまの釋(しゃく)の一字を頂き仏弟子となりましたという意味があります。真宗の伝統として親鸞聖人が釋鸞と名乗られたので、私たち真宗門徒も釋○○と名乗ります。そして真宗では戒名(かいみやう)とは言いません。戒律を保つて生きる聖者ではなく、戒律を保てないながらも、仏教者として生きるただの人、凡夫(ぼんぷ)であるからです。つまり生前から仏教者として生きるということを表明した名前が法名です。

実際に帰敬式とはどういうことをするのかといいますと、先ず、ご本尊の前でおかみそりを受けます。司式者が剃刀を受式者の頭にあてて三

回ほど髪を剃る格好をします。これで、髪を剃り仏教者になったというわけです。その後、簡単なお勤めのをして、法名の授与式、これから仏教を聞きながら生活してゆくという旨の誓いの言葉を申して頂く、という流れとなっております。帰敬式は本山ではほぼ毎日行っています。

尚、最近では末寺の住職が御門首の代行として、司式することもできるようになりましたので、本山まで行かないで、各、手次寺院で行うこともできます。この場合、教務所に書類の届けをして法名用紙を頂き、住職が書き込むというものです。また、法名は後で申請しますので、ご自分で頂きたい法名を言っていたいただくこともできます。

当西来寺では、ここ数年で受式する方が増えてきました。生まれて親につけて頂いた名前も大事ですが、帰敬式ではご自分の生き様や好み、住職と相談して反映することができ、皆さん一様に、誇らしげな、そして晴れやかな表情になっていらつしやるのが印象的です。

西来寺報

二〇一五年 冬 第二十号

毎年の例時として

今年も報恩講が終わりました。毎年、十月と十一月は報恩講の季節として各末寺や本山で報恩講がつとまります。三浦組では十月十二日より始まり十一月二十三日までの間、本山では十一月二十一日から二十八日まで毎日つとまります。そして当西来寺では、毎年十月二十八日に行っています。本年は作家の高史明(コサミヨウ)氏をお呼びして、自らの念仏者としての歩みを語って頂きました。西来寺の門徒以外の方も大勢いらして頂いて満堂の入りで賑わいました。

ところで蓮如上人は御俗鈔御文(ごぞくしょうおふみ)の中で「毎年の例時(れいじ)として、十七か日のあいだ、形のごとく報恩謝徳のために無二の勤行(ごんぎょう)をいたすところなり。此の七か日報恩

講の砌にあたりて、門葉(もんよう)たぐい国郡(こくぐん)より来集(らいしゅう)いまにおいて其の退転(たいてん)なし。しかりといえども、未安心の行者にいたりては、争(いさ)い争(いさ)い報恩謝徳の義(ぎ)これあらんやしかのときともがらは、この砌において仏法の信・不信をあいたずね、これを聴聞して、まことの信心を決定すべくんば、真実真実、聖人報謝の懇志(こんし)の相叶(あいか)う(あいか)う)べき者なり」と述べ、報恩謝徳のために最高のお勤めをいたすのであり、またこの報恩講を通して、仏法を聴聞してまことの信心に目覚めるのであれば本心に親鸞聖人の御心に叶うものなのであると申しております。

つまり報恩謝徳とは、お参りした一人一人が仏法を聞き自らの信心を明らかにすることなのです。私たち真宗門徒にとつて報恩講は大事な一年の区切といえましよう。

是非、未受式の方も帰敬式を受け法名を名乗り、仏教者としての生活を始めてください。



ホームページでも報恩講の写りがみられます <http://sairaiji.com>

尚、今回西来寺の報恩講をお手伝いくださった方々本心に有り難うございました。また参詣して頂いた人々ご苦労さまでした。皆様に支えられて今年の報恩講も素晴らしいものとなりました。この場をかりまして深く御礼申し上げます。

さて、本山の報恩講が終わると、本格的な冬の到来となり、すぐ新年がやってきます。一日一日を大切に、良い新年を迎えたいものです。



本のプレゼント

今年の報恩講では大月書店様の厚意により高先生の著書『月愛三昧』の一部をテキストとして使用させていただきました。ご参加の方には、次が必要事項を明記の上、ハガキでご応募ください。

- ・お名前・住所・年齢
- ・希望する本の番号とタイトル
- ・報恩講や西来寺報の感想など
- ①『月愛三昧』(1冊)
- ②『いのちと責任 対談 高史明・高橋哲哉』(10冊)

報恩講の感想、呼んでほしい講演者など報恩講へのご意見をご記入いただければ、優先的に当選させていただきます。締め切りは、1月末日消印有効。当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。

除夜の鐘(大晦日) 修正会(元日)

十二月三十一日(木) 午後十一時四十五分

西来寺梵鐘は横須賀市内に残る最古の梵鐘で、横須賀市の指定重要文化財です。みなさんでついで、新しい年を迎えましよう。

修正会

一月一日(金) 午前十時

修正会は元日に行われる法会で、その年の生活の目標を立て、心を新たに求道の道を進む決意をします。

私たちに何かが本当に大切なことであるか。それを改めて考え、新たな一年に臨むのが修正会です。

是非、ご参加ください。

今年も報恩講の準備に皆様のお力添えをいただきました



高いところに登って、お餅をきれいに積むのは難しい



お花は皆さんで手分けして美しく活けてくださいました
個性的で素敵です



綺麗に飾り付けできました、ありがとうございました

親鸞聖人が『正像末和讃』の中に和讃を残しているように、言葉を覚える前の赤子にこそ真があるが大人にはそれが無い。私たち現代の大人は言葉という知恵に囚われて、争いを解決できずに深めていく。それに気付き本当の意味で平和を見つめなければいけない。本当に「知る」ということを分かかなければならないのではないのでしょうか。

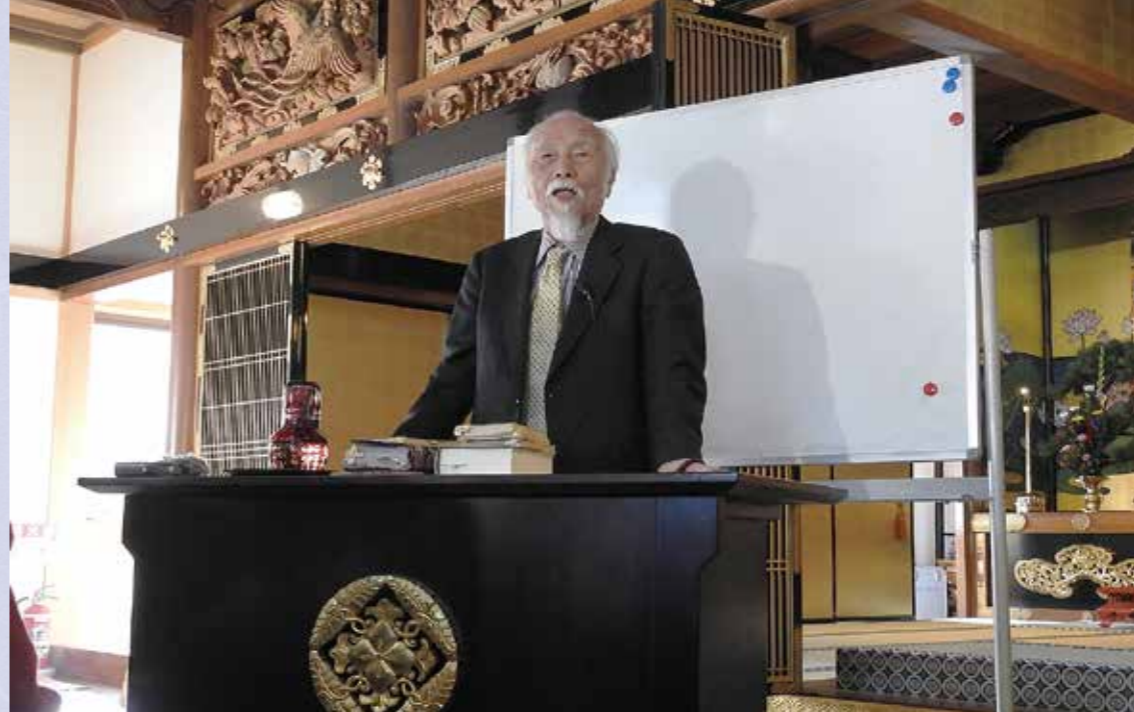
よしあしの文字をもしらぬ
ひとはみな
まことのころなりけるを
善悪の字しりがほは
おほそらごことのかたちなり

今回の講演の中で、先生は私たちにいくつも問題提起をされていたように思います。私たちは今の世界の状況を子供たちにどのように伝えていけるのか。人間の知恵は良し悪しを判断させていくものだが、それを使って争いを続けているのが今の大人である。

二〇一五年 報恩講報告

高史明氏 講演

「念仏者への道くわが人生を語る」



前日の夜から降り出した大雨が
あがり、お日様が照り空は一面
真っ青になりました。気温は10月
末とは思えないような暑い日の報
恩講です。法要から講演まで3時
間、参加いただいた人数は150
名以上になりました。暑い中、お
越しいただいた方には、改めてお
礼を申し上げます。

今年の報恩講では特別記念講演
に、作家の高史明先生をお呼びし
講演していただきました。講題
は『念仏者への道くわが人生を語
る』。先生の生い立ち、少年期、
戦時中の記憶、浄土真宗とのご
縁、十二歳で自死された息子さん
のこと。思いたすようにひとつひ
とつゆつくりと語ってくださいま
した。

「講演に呼んでいただき、今日
のような厳しい世の中で私に何が
できるものか考えます。私はまだ
まだ念仏者というにはおこがまし
いほどで、今でも親鸞聖人の言葉
の前では背骨を貫かれる思いがい
たします。ですから今回のように

お寺からご縁をいただくと逃げ出
したい思いがするほどです」と語
り始めた高先生。様々な経験を経
て、作家としても多くの賞を受賞
されている先生ですが、講演など
でお話しされる時には奥ゆかし
く私たちと同じ目線で語ってくだ
さいました。

高先生のお話は、先生が書いた
本を読んでいるような気がする詩
的で情景が目には浮かぶような語り
口調でした。少年時代に隣の子と
ケンカをして、貧乏長屋では薄い
紙の壁に箸を刺して、両方から
ひっぱってケンカしたことを話せ
ば本堂は笑いに包まれ、その子と
半世紀ぶりに会い、亡くなる際際
に涙を流しながら思い出を語った
話になれば本堂にはすすり泣く声
も聞かれました。辛い状況の回想
の中にユーモアがあり、くすりと
笑わせてくれるエピソードを話し
てくれる。悲しい話の中にも温か
さがある。いつを振り返ってもそ
こにユーモアや幸せなこと忘れな
いのが高先生の歩いてきた道なの
ではないかと感じました。